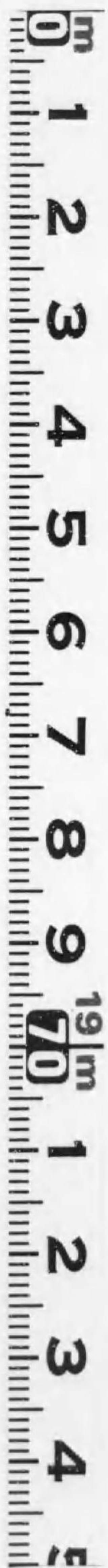




特109

569

花見の巻



始





ノッキナ文庫
トウサン
花見の影

特 109
569

国会図書館
51.10.11

特 109

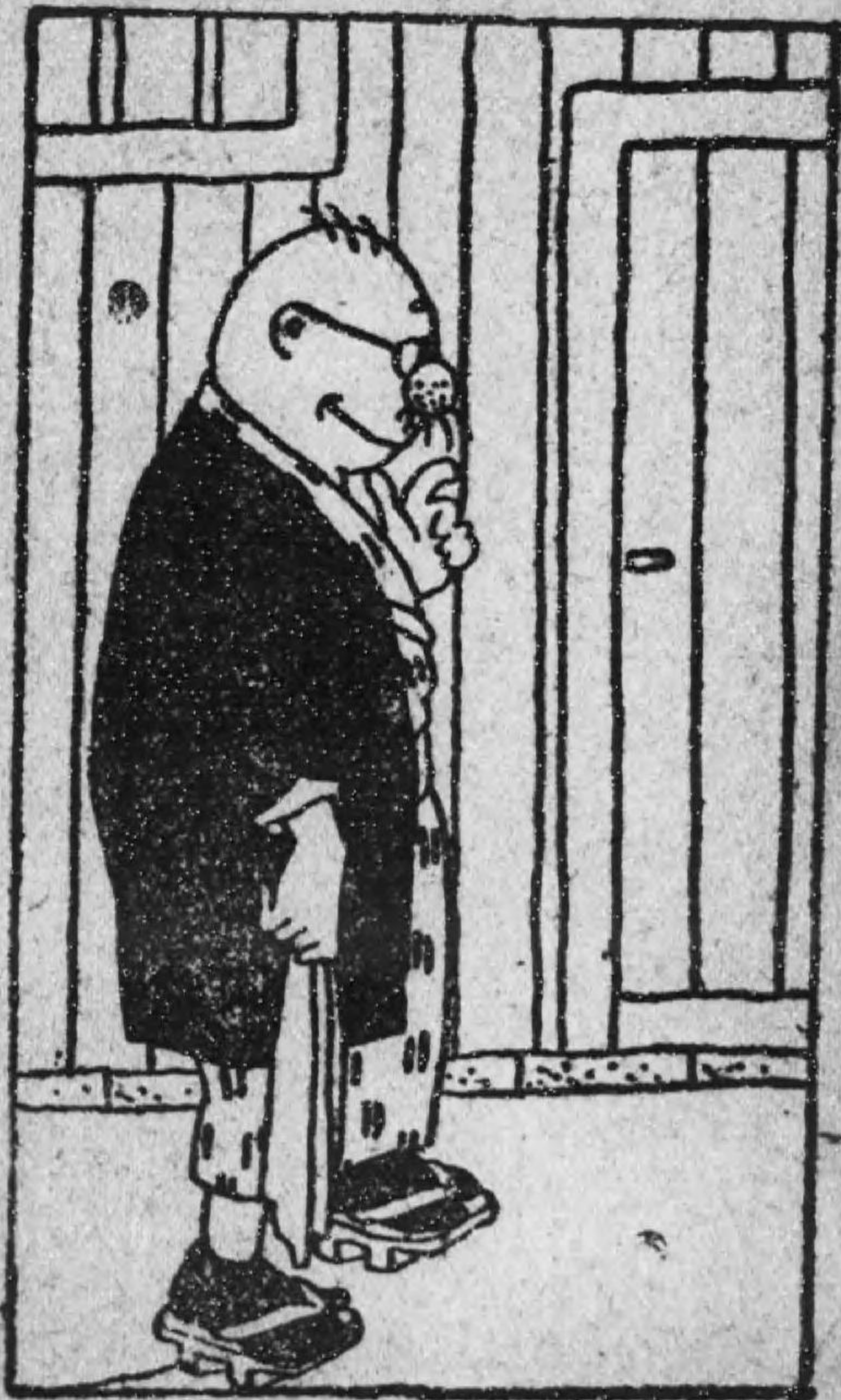
569

ノンキナ
トウサン

文庫 花見の巻

ノンキナトウサンは朝早くから、手拭をさげて
 宜い気持ちで風呂から歸つて來ました、そして入
 口まで來た時に、不圖昨日隣りの大將と、今日花
 見に行く約束をして置いて、忘れてゐた事を思ひ
 出したのです、然うだつた、所で氣の早い隣りの
 大將の事だから最う飛ば出して了つたかね。





二
 兎に角一遍尋ねてみようと、トウサンは隣りの
 入口から、オイ大將居るか、と聲を懸けけまし
 たすると、家の中から寝呆け聲で、應トウサンか
 待つてたよ、まあ這入り給へ、と云ふからトウサ
 ンが這入つてみると、大將は未だ蒲團の中にくる
 まつて、龜のやうに首だけニューと突きたてゝゐ
 るのでした、ナアー、大將未だ蒲團の中かい
 と流石のトウサンも驚きました。

所で大將今日は花見に行く約束だつたらう、と
 トウサンが云ひますと、違ひない然うだつたね、
 俺はすつかり忘れてゐた、何んだ約束をして忘れ
 る奴があるかい、とトウサンは自分も今しかた思
 ひ出した癖に、豪ら相な事を云つてゐます、トウ
 サン少し待つて呉れ急ぐ支度をするから、と大將
 は早速飛ぶ起きて着物を着ると、さあ往かう、と
 云ひました、大將手水を使はないのかい。

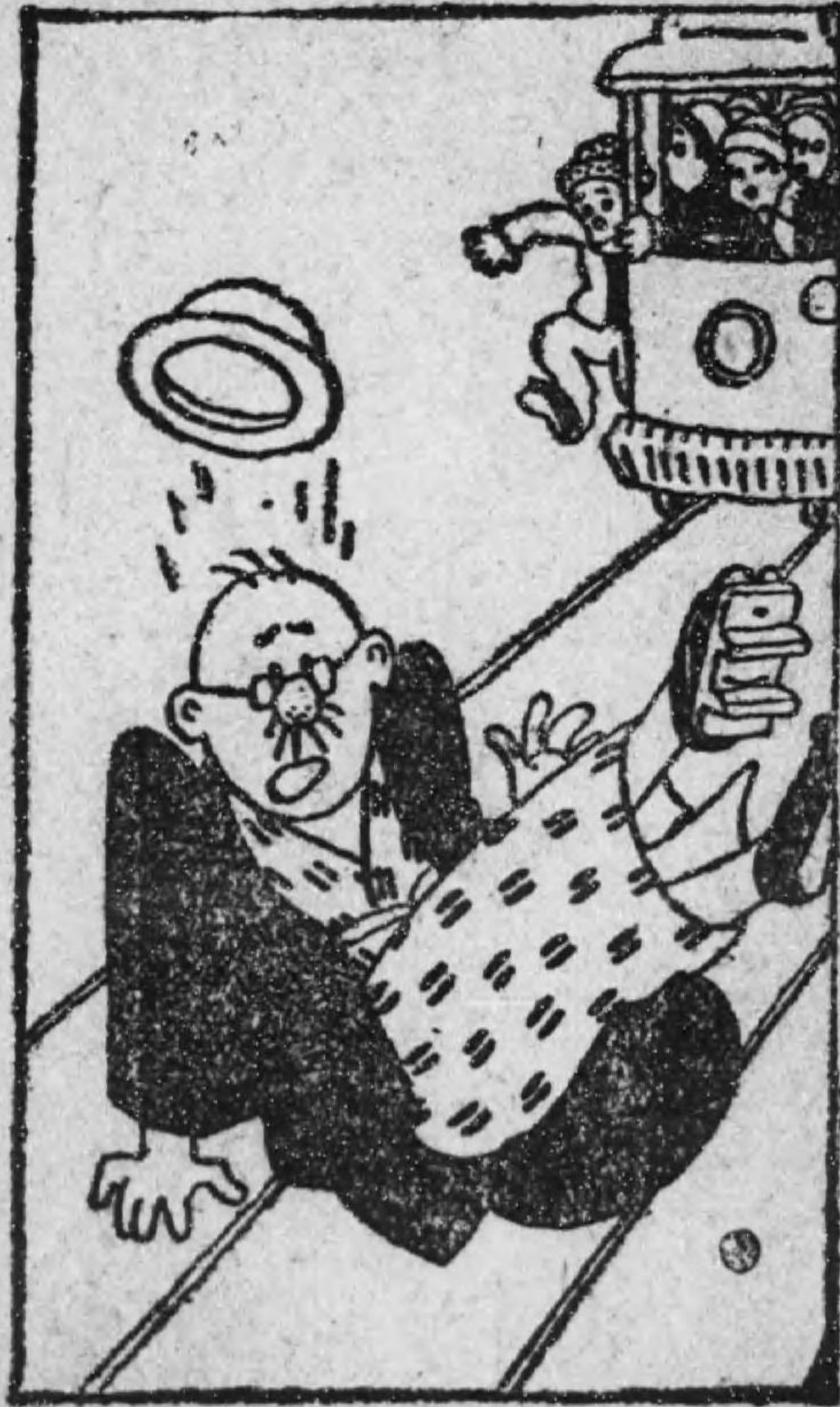


大將は済ましたもので、手水なんか先方へ往つてから、何方か溜りり水で洗へば譯はないさ、と平氣です、ノンキナトウサンも、是れでは大將の方がノンキな事は一枚上だと感心しました、ちやそろ／＼出掛けるかな、と兩人は家を出て停留所へ來ますと、來る電車も來る電車も、人が鈴なりにぶら下がつて、満員々々で何うにも乗れ相には思はれませんでした。





大將は癪に觸へて、オイトウサン、恁麼事をし
 て待つて居ては、何時迄過つても乗れ相にないか
 ら、今度來たら俺は飛び乗るよ、トウサンも急ぐ
 俺の背後から尾行て來な、ヨシ心得た、と兩人は
 相談して待ち構へてゐる所へ、相變らす一台の満
 員電車が遣つて來ました、トウサン早く來な、と
 云うなり大將は、飛鳥の如く電車に飛ぶ着いた、
 トウサンも續いで同じく飛ぶ着いた。



所^{ところ}がトウサンの飛^とび着^ついた時^{とき}には、電^{でん}車^{しゃ}は最^もう
 通^{とほり}過^りぎて了^{しま}つてゐた跡^{あと}だつたから、トウサンは敷^{しき}
 石^{いし}の軌^き道^{どう}の中^{なか}へ、美^み事^{こと}に太^ふ短^{みぢ}かい躰^{からだ}を、團^{だん}子^ごのや
 うにコロ／＼と轉^{ころ}がしたので、電^{でん}車^{しゃ}の方^{ほう}からそ
 れを眺^{なが}めた大^{たい}將^{しょう}は、呼^あッ危^{あや}険^{ない}ッ、と思^{おも}はす聲^{こゑ}を出^だ
 して、電^{でん}車^{しゃ}から乗^のり出^だし相^{さう}に成^なつたので、此^{こん}度^どは
 乗^{せう}客^{きゃく}が皆^{みな}驚^{おどろ}いて、一^せ齊^いに、危^{あや}険^{ない}ッ、と叫^{さけ}んだので
 大^{たい}將^{しょう}はやつと落^おちるのから逃^{のが}れました。

トウサンは電車道に立ち上がつて、それから幾
 台かの電車を待ちましたが、どれもこれも満員で
 到底トウサンには乗れ相にも思はれませんでした
 大將は最う今頃は先方へ往き着いてゐるだろうと
 思ふと、早く往きたくて仕方がないけれど、何う
 にも詮方がないので、電車に乗るのを諦めて、や
 がてとぼ／＼と歩るき出しました、ですから先方
 へ着いた時分は、四時間も過ぎて居りました。



トウサンはそれから一生一命、大將の姿を探し
 はじめましたが、何しろ澤山な人が出て居るもの
 ですから、却々急ぐに見着からないので、オー
 イ大將何處だツと、トウサンは大きな聲で怒鳴つ
 て歩くものですから、澤山な人達は呆氣に取ら
 れて、不思議相にトウサンを見送つてみました。
 然しトウサンは腹が空つて来るし大將は見着から
 ないし、氣が氣ではなかつたのでした。



彼^{あんな}麼^{たら}弱^せ虫^{むし}等^らは追^おつ驅^かける程^{ほど}の事^{こと}もあるまいと、
 頭^{あたま}に出来^{でき}た瘤^{こぶ}をさすりながら、亦^{また}もベンチへ腰^{こし}を
 下^{くだ}ろしてゐる時^{とき}、驅^かけ付^つげて來^きた巡^{じゆん}査^さが、やあ怎^{どう}
 うも君^{きみ}有^{あり}難^{がた}う、今^{いま}の奴^{やつら}等^らはありや不^ふ良^{れう}青^{せい}年^{ねん}でね、
 警^{けい}察^{さつ}の方^{ほう}も捕^{とら}へやうと焦^{あせ}つてゐるんだ、怎^{どう}うか此^こ
 の次^{つぎ}に出^で會^あつたら、逃^にがさないやうに取^とり押^おへて
 呉^べれ給^{たま}へ、然^{しか}し君^{きみ}は却^なか々^く勇^{ゆう}氣^きのある豪^{かう}傑^{けつ}ですなえ
 とトウサンに云^いひました。



然^さうしてゐる處^{ところ}へ學校^{がっこう}歸^{かへ}りの小供^{こども}が四五人^{にん}遣^やつて來^きて、大將^{たいせい}の寢^ねてゐるのを見^みると堪^{たま}りません、悪戯^{いたづら}好き^{ずき}の四五人^{にん}は早速^{さつそく}筆^{ふで}と墨^{すみ}とを執^とり出^だして、彼^かれの面^{かほ}一^{いつ}ぱい悪戯^{いたづら}書^がきを仕^してから逃^にげて了^{しま}いました、亭主^{ていしゆ}は其^{その}麼^ま事^{こと}を知ら^しないから眼^めが覺^さめるとさぞかしトウサンか探^{さが}してゐるだらうと、自^じ分^{ぶん}もヒョロ／＼する脚元^{あしもと}で、トウサンを探^{さが}しに出^で蒐^さけるのでした。



連れられて来たのは、然うした不良青年達の巢窟です、そしてトウサンは穴藏の中へ投げ込まれて、了つたのです。周囲は眞暗で何もわかりませんが、天井の明り窓からはかすかに灯の光りが見えます、トウサンは其處にある柱を探り當て、それに縛られてゐる繩を擦り付けて、やつと其の繩を断ち切ると、全身の力を両脚に籠めて、やつと懸け聲諸共天井の窓に飛び著きました。



共の時突然木の影から、應トウサン、と聲をか
 けながら、面の眞黒けな男が一升徳利を片手にぶ
 ら下げて、飛び出して来たからトウサンは喫驚し
 ました、そして心の中では、世の中も段々物騒に
 なつて来たものだ、陽も暮れ切らない内から豆駄
 が飛び出して来た、捕らへて遣りたいが斯う腹が
 空つてはどうにも仕方がない、恁魔時には二十六
 計逃ぐるに如かずと、一生懸命逃げ出しました。



ヤア 最初の奴だッ、と不良の一味が騒ぎ立つて
 中へ、當るを幸ひ面も振らず、彼の鐵棒を振り
 廻して暴れ廻ります、不良の一味はバツタバツタ
 と倒されて、只一人のトウサンの爲に彼方へ追ひ
 詰められ、此方へ追ひ詰められ、散々な目に惱ま
 されて、しどろもどろと逃げ走るのです、その時
 一味の團長らしい奴が、扉を開けて逃げ出すのを
 トウサンは早くも見付けました。





其の裡に陽はとつぶり方れて了いましたが、ト
 ウサンと亭主は相も變らずフラ〜〜デラ〜〜と、
 それでも一生懸命に走つてゐるのでしたが、倒れ
 ては起き、起きては倒れ、兩人の着物は最う泥ま
 みれになてゐます、兩人は街の中を随分永い間走
 り續けた上に、或る家の入口まで來ると、トウサ
 ンは倒れとなり最う起き上る元氣がありません、
 其處へ亭主も來て並んで倒れました。

やがて團長は頂上へ昇り着いたと思つた瞬間、
 其の梯子の先を力一杯蹴り返へしたのでした、ア
 ツと云ふ間もなく、怎う云ふ仕懸けが仕てあつた
 ものか、梯子は美事に中程から折れて、バラバラ
 バラと崩れかゝつて來ました、同時にトウサンの
 體も一緒に、高い高い所から、崩れる梯子に混じ
 つて墜落するのです、團長は物凄い笑ひ顔をして
 それを心地よげに視下ろしてゐました。



やがて間もなくお醫者さんをお迎へしたので、
 トウサンに急げ氣が着く事は出来ましたが、最う
 花見なんか眞平御免だご、コリくして仕まいま
 した、亭主は毎日々々舞に來て、トウサン眞實
 に濟まなかつたね、と謝まりました。(完)



終

大正十四年二月十五日印刷
大正十四年二月十五日發行

不許複製

大阪市南區西塚町三番地
編輯印刷
兼發行者 田村榮太郎

大阪府西成郡鷺洲町北浦江七一〇番地
印刷所 聖光社印刷所

大阪市南區西塚町三番地

發行所 田村書店

振替大阪 電話東京 一七九五番
七二一〇〇番